

北海道演劇財団の二〇一八年の活動

北海道演劇財団常務理事／芸術監督 斎藤 歩

二〇一八年、北海道演劇財団が企画制作・主催した演劇公演として最初の作品は、二月にシアターZOOで公演した、札幌座第五回公演「暴雪圏」でした。佐々木讓さんの長編小説作品を斎藤歩が脚色・演出したこの作品は、一回の公演すべての前売り券が完売するほど前評判も高く、北海道ゆかりの文学作品を舞台化するシリーズ・北の本棚の初回作品として、成功を収めました。四月にはシアターZOOで、札幌座Pit「白鳥の歌」を公演。チェーホフ原作の短編作品を、磯貝圭子・林千賀子、札幌座の看板女優に当て書きした二人の半生記のような作品となりました。

五月には、シアターZOOの企画公演として、親子で楽しめる劇のシリーズ「劇のたまご」のぐりぐりグリム第二章「シンデレラ」を公演しました。子供たちのデザインサービス施設「ペングアート」の子供たちによる舞台美術が鮮やかに飾られたこの作品は二〇一九年八月に、札幌演劇シーズン二〇一九・夏の参加作品として、hitaruクリエイティブスタジオで再演することが決定しています。

六月には、札幌座第五回公演「フレップの花、咲く頃に」をシアターZOOで公演しました。第二次世界大戦直後の樺太でのソビエト人と日本人、朝鮮人、樺太アイヌの人たちによる「混住」と呼ばれた時代を、ホエイの山田百次が脚本化し、斎藤歩の演出で公演しました。



フレップの花、咲く頃に

札幌在住でサハリン出身の女優・アリヨナを客演に招き、今後、サハリン・ユジノサハリンスクや、道北での公演が期待されるなど、再演の要望が多く寄せられています。

青森県立美術館と北海道演劇財団の共催で、太宰治の短編戯曲「春の枯葉」「冬の火花」を混ぜ合わせた新作として青森県在住の俳優・スタッフと創造した「津軽の日暮」を七月に青森県立美術館シアターで公演しました。津軽海峡を挟んだ青森県との芸術交流事業も継続し北海道のダンサーや振付家などを派遣することも行っています。

二〇一七年に初演し評判となった「象じやないのに」を清田区で先行特別上演した後、札幌演劇シーズン二〇一八・夏の参加作品としてシアターZOOで八月に公演しました。「象じやないのに」の原作で韓国の戯曲「そうじやないのに」も劇団青羽を招いて同じ舞台で交互上演しました。札幌とソウルを舞台にした日韓交流も一〇年を数え、今後新たな交流の話し合いも始まっ

ています。

一月には、年内二作品目となる親子劇場「劇のたまご」を清水友陽の演出で創作。「おかしな森の赤ずきん」は、観客の子供たちが舞台美術の工作に参加するなど、新しい親子劇の可能性を見出すことができました。

一月四日～一日には、在ハバロフスク日本総領事館の招きでロシアに渡り、アイヌ民族のミュージシャン・ダンサーと創作したパフォーマンス「raprap」を、ハバロフスクのトリアーダ劇場で公演。ワークショップも行い、北海道とハバロフスクの青年交流事業を行いました。

シアターZOOでは、若手劇作家を育成する企画公演を実施。二年目となった二〇一八年は、芸術監督が指名した三名の若手劇作家に、既成の海外戯曲を提案し公演しました。

RED KING CRABはテネシー・ウイリアムズの名作「ガラスの動物園」に挑み、一月一日～一八日に公演しました。TGR札幌劇場祭で審査員特別賞と俳優賞を受賞しました。プロトパスタは、ヴェデキントの問題作「春のめざめ」を二月、木製ボイジャー14号は「ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ」を二二月に公演。いずれも果敢な挑戦に満ちた舞台となりました。

シアターZOOで劇場のことを考えるセミナー企画「シアターZOOラボ」は、芸術監督が、東京の演劇人を札幌に招き、劇場という場所への過剰な想いを北海道で語る場として企画し、第一回は五月に世田谷パブリックシアター、座・高円寺など数々の公立劇場の芸術監督

を歴任されている演出家・佐藤信さんをシアターZOOに、第二回は一〇月に、まつもと市民芸術館の芸術監督で、「上海パンスキング」などでも北海道でお馴染みの串田和美さんを、オープンしたばかりのhitaruクリエティブスタジオにお招きして行いました。多くの演劇ファンが佐藤信さん、串田さんのトークを楽しみ、札幌の若い演劇人たちに多くの刺激を与えてくれました。

そして二〇一八年の最後を締めくくったのが、札幌文化芸術劇場hitaruと北海道演劇財団が共催で制作し、新しい劇場のオープニングシリーズとして公演した「ゴドーを待ちながら」です。一月一八日～二五日の一〇回公演のうち、八回の前売り券が完売し、二千名を超える集客を実現しました。

東京から招いた札幌出身の舞台美術家・島次郎さんによる空間を斜めに切り裂いた舞台美術と、大野道乃さんによる照明が美しく、斎藤歩と納谷真大（イレブンナイン）のコンビネーションに、元天井敷の俳優、福士恵二と高田恵篤が闊入する二時間は、日本演劇における「ゴドー」の歴史を塗り替えた上演という評価を頂き、早くも伝説の公演と呼ばれています。



ゴドーを待ちながら

二〇一八年は「暴雪圏」に始まり「ゴドー」で終え、

満員御礼で始まり、締めくくることができ、皆さまに心より感謝しております。

このような各種演劇制作事業のほかにも、劇場運営、

ワークショップ講師の派遣など、様々な事業を行いました。

二〇一九年も劇場で皆様をお待ちしています。

札幌市民交流プラザ二〇一八年の活動を終えて

公益財団法人札幌市芸術文化財団 市民交流プラザ事業部 劇場事業課長 高橋 秀典

一 札幌市民交流プラザのオープンについて

札幌市民交流プラザは、多くの皆様の期待のもと、二〇一八年一〇月七日にオープンしました。市民交流プラザの四階から九階に位置する札幌文化芸術劇場 hitaru は、北海道初の多面舞台と三層バルコニー形式二三〇二席を備え、オペラやバレエ、ミュージカル等、大規模な舞台芸術の上演が可能となりました。また、可動式の音響反射板を有し、ピアノやオーケストラの音も非常に良い音で楽しむことが出来ます。

それまで、各種公演が行なわれてきたニトリ文化ホールの閉館に伴い、その機能を引き継いでいることもあり、貸館事業も多く、ロック、ポップス、演歌等様々な公演が行なわれています。また、劇場の他、三階には劇場の主舞台と同じ規模で移動観覧席もある「クリエイティブスタジオ」があり、劇場公演のリハーサルや演劇、ダンスの発表等に利用することが出来ます。

二〇一八年の活動は、一〇月にオープンしてから二ヶ月までの三ヶ月間という短い期間でしたが、この短期間に実に様々な多くの公演が開催され、いずれの公演も多くの皆様にご来場いただきました。

ここでは、市民交流プラザ劇場事業課の主催事業を中心に振り返りたいと思います。

二 札幌文化芸術劇場 hitaru

札幌文化芸術劇場 hitaru の柿落とし公演として、一〇月七日（日）、八日（月・祝）にアンドレア・パツティストニ指揮によるオペラ「アイーダ」を開催しました。神奈川県民ホール、兵庫県立芸術文化センター、ichiko 総合文化センター等との共同制作で、札幌公演は、ダブルキャストによる二日公演。チケットはプラザメンバー向け先行販売、一般販売ともに即日完売し、公演もパツティストニの終始、迫力ある指揮で、独唱、合唱、オーケストラをまとめ、hitaru の潜在能力を十分に引き出すような名演でした。とりわけ、第二幕の壮大な凱旋のシーンは庄巻のパフォーマンスで来場者を魅了し、終演後も多くの来場者、評論家、関係者の皆様から、「想像以上に素晴らしい公演であった」と歓喜の声を聞くことができました。

続いて十一月二三日（金・祝）、二四日（土）には、